

# PERSPECTIVE'81 開催さる!!

## 「建築の心」の展開

会長 光 藤 俊夫



さきに東京松屋において、日本デザインコミッティーのはからいによる「PERSPECTIVE'81」が開催されました。この「パースペクティブ」は、建築に携わる人たちはかりでなく、広く一般の方々にも親しく接していただける場の設定には大きな反響がありました。そしてこの企てに全面的に協力、それはしかし一部会員の作品掲示にとどまらざるを得なかつたにしても、日本アーキテクチャーレンダラーズ協会の存在も、大いに喧伝され得たことは幸いでした。もちろんパースペクティブが、このような展覧会のためにあるものではありません。その本来の目的は、あく

まで建築主と設計者との間での、円滑なコミュニケーションの中にあります。しかし、それはやがてだれもが享受し得る社会環境形成の上で、多くの人たちの認識と共感の上に立つものとならなければなりません。その意味では、ときにそれらの作品が、そしてその作品の内奥にひそむもの、すなわち「建築の心」を広く紹介する、そんな新しい機会の誕生を喜ばないわけにはいきません。

さて、来春の2月には、当協会が主催する「パースペクティブ展」が東京伊東屋及び大阪心斎橋ソニービルで開催されます。大方諸彦のご活躍を念じております。

## PERSPECTIVE'81 の 報 告



日本デザインコミッティー主催による作品展「PERSPECTIVE'81」(9月11日～9月30日銀座松屋デザインギャラリー)は、総入場者数約1万人をかぞえ、盛況のうちに無事終了いたしました。

会員の皆様には、出展、会場係等のご協力をいただき、ありがとうございました。

今回の作品展は、当協会が協賛する形式で行われましたがために、パネル出展が一部会員に限定されたことが悔やまれますが、百貨店内のギャラリーということもあってか、多数の一般の方々に公開することができます

たことは、協会の存在を広く社会にアピールすることができたと言えそうです。

最終日に行われましたパーティーも日建設計副社長、日本デザインコミッティーの方々、高須賀名誉会員の諸氏をお迎えして楽しく挙行することができました。また、反省と今後の展望を兼ねたシンポジウムも、関西支部より小西久雄氏に出席していただき、建設的な意見を多く聞くことができました。

さらに次代への発展を期して活動を展開していく所存です。皆様のご協力を切望します。

(企画委員長 大野防)

## PERSPECTIVE'81

—今日の建築パース展

会期=9月11日(金)~9月30日(水)

会場=松屋銀座7階デザインギャラリー

主催=日本デザインコミッティー

担当=松本哲夫

協力=日本アーキテクチャーレンダラーズ協会

九州のクラフト 9月11日(金)~23日(水)・6階クラフトギャラリー

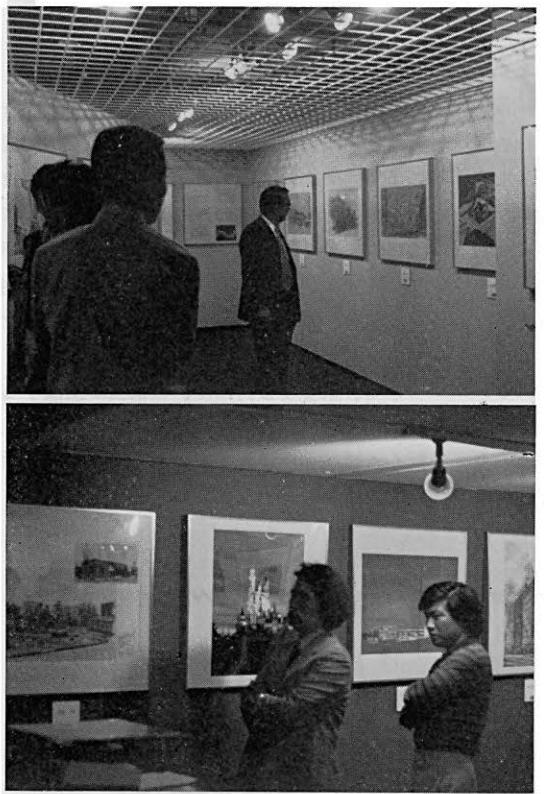
## MATSUYA GINZA

建築家やデザイナーにとって「透視図」という日本語で反射的に脳にうかぶPerspectiveという英語には、釣り合い、前途、将来の見通し等の意味もある様に、パースは建築設計という行為にとって、図面と同様、建築家の頭の中にある将来建つべき建築の有り様を直截に第三者に伝える手立てとして重要な役割を担っている。日本の第一線で活躍する20人のプロの力作により、現代の建築パースの種々相を是非御覧下さい。

松本哲夫



上 閉幕後のパーティにて林昌二氏よりお言葉をいただく  
左 会場スナップ



『パースの描けない建築家は、夢か喰えない漠のようなもの』とは光藤俊夫のことばですが、仕事の細分化は時代の流れで設計の分野でも同じです。  
建築のパースを専門のレンダラーが描くようになって20年になります。  
日本アーキテクチャーレンダラーズ協会も2年目を迎えました。  
建築家の意図を正確に、かつリアルに、わかりやすく、モットーに、プレゼンテーションする、いわば建物のカタログ作りが私達レンダラーの仕事です。  
一品生産の建築物のカタログ(パース)は直接クライアントに手渡され、一般の人々にはなかなか目にふれないものなのです。  
ここに展示したものは協会会員の中のほんの一部に過ぎません、機会を得てさらに充実させて行きたいと考えております。

昭和56年9月11日

日本アーキテクチャーレンダラーズ協会理事長 福永文昭

ごあいさつ  
アーキテクチャーレンダラーズの技術向上、後進の育成、ならびに社会的地位の確立を目指して結成された、日本アーキテクチャーレンダラーズ協会は、発足以来、今夏で一年を経過いたしました。この間に、対外活動としてのセミナーは数度を重ね、2回に涉って開催された「パースペクティブ技術講座」も、斯界に好評をもって迎えられ、私たちの目的に沿った順調な成果を、着々とあげることができたのは、ひとえに関係各位の御理解と御協力のたまものと感謝の意ありません。加うるに、この度、はからずも一部会員の作品を、建築に携わる人たちばかりでなく、広く一般の方々にも、親しご覧いただける展示会を持ち得ましたことは、当協会のいまよの躍進に大きな功績となるものと、喜び思っております。これを機に「建築透視図(パースペクティブ)」に、正しい認識の上で、深い関心をお持ちいただけるなら大幸です。

昭和56年9月11日

日本アーキテクチャーレンダラーズ協会 会長 光藤俊夫

# PERSPECTIVE '81大盛況裡に閉幕

## 展覧会概要

名 称 第278回デザインギャラリー展

PERSPECTIVE '81／今日の建築  
パース展

会 期 昭和56年9月11日(金)~9月30日  
(水) 木曜定休日・開催18日間

会 場 松屋銀座7階デザインギャラリー

主 催 日本デザインコミッティー  
(担当松本哲夫)

協 力 日本アーキテクチャーレンダラーズ協会

規 模 会場床面積 45.4 m<sup>2</sup> 壁面長 35.5m

展 示 750角アルミ額・アクリルカバー  
建築パース原画22点

パブリシティバネル4点

1000×1000スクリーン、スライド映写  
オートプロジェクターを用いて  
80点のパースを常時映写

## 事業経過

協会主催の原画展を開くための会場として松屋のデザインギャラリーにも交渉したが、その折には、諸般の不都合で実現せず、伊東屋で昭和57年2月に開催することとなった。その後、松屋デザインギャラリーよりキャンセルとなったスケジュールの穴埋めにパース展を開きたいという意向で協力を求める要請があった。会場が狭いことと準備期間が足りないなど難点があったので、一度はことわったが、再度の要請があった時、光藤会長をはじめ理事の中で積極的な意見が強まり、伊東屋原画展の前哨戦として、松屋展に協力しようとすることになった。

8/6 緊急理事会を開き、松屋展協力開催を決議、出品者20名の選出を行った。内7名は関西支部にて選出

8/7 事務局緊急報告により全会員に通知  
8/12 実行委員会、同展開催準備にとりかかる

8/21 展示方法 パブリシティに関して日本  
デザインコミッティー側と調整

9/3 実行委員会 出品作品の額装、準備段取り調整

9/9 実行委員会 最終打ち合わせ、芳谷氏  
来席(関西)

9/10 搬入 飾りつけ立ち合い、関西からは  
辻本氏来場

9/11 初日日刊工業新聞記者カメラマン来場

9/12 協会のエスキースブック販売開始

9/21 読売新聞記者来場

9/22 主婦と生活社記者来場、亀倉雄策、清家  
清両氏来場、スライドプロジェクト  
不調となる。以後23、25、26、27日の  
4日間休止する

9/28 11:40 スライド映写再開

9/30 終了、搬出 18:30~21:00パーティー  
(松屋8階)

10/6 協会シンポジウム 四谷主婦会館  
18:00~20:30

10/14 実行委員会 事業収支報告

## アンケート集計と分析

回答者の特質 半数が20代であり男女比率は2:1、職業は7~8割が建築、デザインの分野に属している。通りすがりに立ち寄った数が2~3割である。

設問 建築パースの仕事と係わりをお持ちですか

A・パースを制作している	60人	18.5%
B・パースを発注している	50人	15.5%
C・パースを仕事で扱う	71人	22.0%
D・パースを教えている	5人	1.6%
E・パースを学んでいる	67人	20.7%
F・関係ないが興味がある	70人	21.7%
合 計	323人	100%

設問 この展覧会を何でお知りになりましたか

A・案内状	23.5%
B・ポスター等	14.9%
C・人から聞いて	35.0%
D・通りがかり	26.6%

設問 A.R協会についてどの程度知っていますか

A・くわしく知っている	8.7%
B・存在は知っていた	34.0%
C・知らなかった	57.3%

設問 どんな原画展に関心があるか

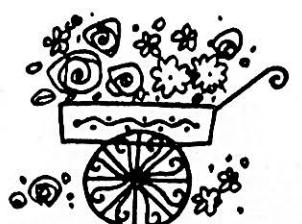
・パースに係わりの深い人たちは、海外作品展の人気が高い
・パースを教えている人が公募展に大きな関心を示している
・学んでいる人の最高位はスタディーパース
・会員総展示は協会のデモンストレーションとして意義が深いのだが、受け取る側ではさほど期待されていない。会員の顔合わせにプラスアルファの要素を盛りこむ必要がある

設問 自由意見を求めて

約1割の38枚に記入があった。大半は催しに対する賛辞(10件)、その他、次回展の通知を求めるといったコメント(8件)、感想、

意見では次のようなものがあった。

- ・作品の数が少ない。(3件)
- ・写真作品の原画を見たかった(2件)
- ・室内パースが少なすぎる(2件)
- ・精密な作画が興味深かった
- ・スライドの画面を大きくした方が良い
- ・作者の自己紹介がほしい
- ・図法や材質など既成のものにとらわれず、絵画として成り立つものが望まれる。29歳男・設計
- ・それぞれの作家の異なった画風にふれられて興味深かった。33歳・女・レンダラー
- ・出品目録がほしかった。原画とともにそのパースを印刷したもの、その建築の完成写真を比較展示してほしい。28歳・女・広告
- ・絵画的な作品よりグラフィカルな傾向の作品をもっと見たかった。21歳・男・学生
- ・描写基準がないと描き方によってつまらない建築でも良く見えてしまうことがあるのではないか。レンダラーは建築家なのか、画家であった方が良いのか。34歳・男・自由業(第三者的客観的な素朴な疑問か。パースは建築家の仕事なのか、画家の仕事なのか)
- ・展示した作品の目録・技術を公開してもらいたい。22歳・男・学生(技術の公開とは、用具・材質・データ表示を意味するものと思われる)
- ・佐々木氏の作品はどのようにして描かれたものか不思議に思いました。19歳・女・学生(もうひとり同文で、記名の上、描き方を教えてください、とあった)
- ・日本におけるパース及びスケッチはこれからという感が強い。〈中略〉表現よりも創る行為に深くかかわってゆくべきだ。24歳男・建築士(ジャコビ等を例にあげて、建築家の造るパースからの発想と思われる)
- ・全体の作品がもう一步という感じ。例えばテクニックにこだわって絵としてのバランスをくずしているなど。39歳・男・インテリアデザイナー(レンダラーのハートを求めている)



# 建築バース実技講座

第1回セミナーに引き続き、第2回目が夏季セミナーとして、新宿の工学院大学に於いて開催されました。

講師は教育開発委員のメンバーに福永、大野両氏が加わり、8月20日(木)から22日(土)の3日間、10時から17時、延べ18時間という日程でした。カリキュラムの内容及び講師名は別項の通りです。今回は前回の体験に基づいて、カリキュラムの作成、事前のPR等、各委員の皆様の一致協力のもとに、和気あいあいの中にもかなりの成果を挙げ得たものと思っております。

各部門を担当された委員の方々、本当にご苦労様でした。常日頃、それぞれ忙しい仕事にたゞさりながら、各担当分野で精一杯の努力を惜しまず、中には深夜に至るまで準備のために協力してくださった方もおられて、さぞ大変だったことと改めて頭の下がる思いがいたします。

しかしながら、これだけの努力にもかかわらず、まだまだ反省する事項も多く、こういった短期セミナー開講のむずかしさをひしひしと感じます。例えば、会場について考えてみますと、実技指導を行える教室としては、机・照明等、作画する上での必要な条件を完全にみたしきれず、また、受講者レベルの問題にしても、初心者と、多少の経験者が同一講義内容でよいのかどうか、中には二度三度と受講を希望している人もあり、そういう方々への配慮等、細かくチェックしていくと、かなりの要項が出てまいります。いずれにせよ、こういった諸々の問題は、一気に解決しようとしても無理であり、次回に、またその次にというように、チェックを重ねていって、一步一步より理想的なセミナーの内容づくりに努力を積み重ねていくことが良いのではないかと思います。名実ともに頂点に立ったセミナー運営のために教育委員一同一致協力していかなければならぬと思います。

さらに今後とも協会の皆様の多大なるご協力をお願いいたします。

今回のセミナーは2回目もあり、前回に比して多少なりとも経験的に処理できることもありましたが、準備期間、及び事前のPR(根回し)をさらに充実させ、受講者数の拡大協会加入者の増加を図っていくつもりです。現在第一線で活躍している諸兄姉の力量を十分に發揮していただくためにも、我々教育開発委員会としては、このセミナーをより素晴らしいものにして、レンダラーの底辺拡大、レベルアップの一助につなげていかなければならぬと思っています。

今後の方針につきましては、教育委員会及び各委員会でさらに検討していくわけですが、第3回のセミナーでは、さらにより充実した内容にしていくためにも、今後ともご協力をお願いし、我々としても受講者のアンケート調査等も行い、それらを基に総合的によりよい方向に持っていきたいと思っています。

(教育開発委員 加藤 昭)

## 授業内容及び講師名

1日目 (6時間)	バース概論(1時間)……福永文昭 透視図法(3時間)……福島 昇 〔内1時間実技あり、4点作図完成〕 光と影(1時間)……栗原治久 〔内20分実技あり、作図に影を入れる〕 添景(1時間)……門脇信夫 〔内20分実技あり、作図をトレース及び添景の下絵を入れる〕
2日目 (6時間)	画材の説明とつかい方(0.5時間)……加藤 昭 色彩(1.5時間)……大野 防 〔内20分実技あり、混色の出し方いろいろ〕 実技(4時間)……北村武司、森芳信、南几代美、大和祐美子、門脇信夫 〔最初描き方のスライド説明〕 〔後半に会員作品スライド説明〕
3回目 (6時間)	実技(5時間)……山城義彦、阿部雅治 佐津前実、村井謙介、砂山文則 作品評会・終了式(1時間)……福永、福島、山城



## 企画委員会

日本デザインコミュニティ主催による作品展(PERSPECTIVE'81)も終了し、当協会が主催する作品展の準備が進んでおります。

東京展(実行委員長 大野防)

会期 昭和57年2月9日～15日

会場 銀座伊東屋ギャラリー

大阪展(実行委員長 宮後浩)

会期 昭和57年4月5日～11日

会場 心斎橋ソニービル8階

出展資格 当協会正、準会員

規模 約60点

日頃の力作を期待しております。詳細は別紙配布または企画委員会まで。

## 教育開発委員会

8月 第2回建築バース実技講座開催

参加39名、於工学院大学 8/20～8/22

9月 活動ナシ

10月 定例集会 10/27(於Ken Studio)↗

## 理事会報告

第2回通常総会が6/27に開催され、その後の活動も着々と進んでいます。6号紙記載以降の状況は下記の通りです。

- 6/16 (於日建)  
・役員改選の選挙開票結果、常任委員長及び理事決定  
6/23 (於日建)  
・理事長に福永氏再選  
・通常総会の委細打ち合わせ  
6/27 第2回通常総会開催、於つま恋(静岡県掛川市ヤマハリゾート内)  
7/14 (於日建)  
・広報委員長佐々木理事、一身上の理由で辞意表明、承認される。広報委員会内の選挙を行う。なお、深谷氏は健康上の理由で被選挙権を辞退表明、承認された。  
・王子職業訓練所より講師派遣の依頼があった。  
3/25 (於日建)  
・広報委員長選挙開票結果、中野、山澤、福田の三氏同票で再選挙となる。  
・関西支部より辻本、刈谷両理事出席、近況報告あり。  
・PERSPECTIVE'81に対する討議  
9/8 (於日建)  
・広報委員長再選挙の結果中野氏に決定、それに伴って理事補欠選挙により、山澤、水

## 委員会報告

↗ 参加委員10名、オブザーバー(広報)1名

・夏期セミナー収支報告、講師料の算出。なお年2回のセミナー開催は受講生の動員、宣伝期間、講師の手配などむずかしい面が多く、次回の会期、時期等については理事会での協議事項とする。また、外部団体主催の技術講座等についての講師派遣は、公共、民間を問わず慎重に行うべきとの結論を得る。

・広報紙への原稿参加(加藤、村井両氏)等が話し合われた。

11月 王子職業訓練所にてミバース講座

開講 受講生50名、講座期間7日間(1日2.5時間)

講師 福島昇、阿部雅治、栗原治久  
・なお、来年に向かっての活動予定としては2月の作品展に販売を予定しているミバース技術テキスト(基本編)の編集に伴う内容改訂、等が上げられる。

戸岡両氏が新理事となる

- ・機関紙ARの編集委員会を設ける。編集長に水戸岡理事を選出  
・王子職業訓練所へ講師を派遣することに決定、講師料討議  
・PERSPECTIVE'81の準備状況報告

10/13 (於日建)

- ・王子職業訓練所の委細打ち合わせ報告  
・広報の立場から中野理事「建築バース集成」に執筆  
・機関紙ARの次号を年内に発行したい  
・PERSPECTIVE'81の反省の意味でシンポジウム開催  
・ARの監事に森、福島両理事決定  
・関東支部長に山澤理事決定  
11/10 (於日建)

- ・夏期セミナー収支報告  
・機関紙AR7号紙の進行状況報告  
・2月並びに4月原画展について討議

■当協会の活動についてのご意見や、機関紙ARに対する感想を、当協会事務局へお寄せいただきますようお願いいたします。

## 広報委員会

広報委員会は6/4の編集会議後、7/3に機関紙AR通巻6号紙を発行、その後、委員長辞退によりしばらくは再選挙等で休止状態、9/8の新委員長決定により委員会を再開しました。

10/20

・機関紙ARの年間スケジュール決定

12/15 通巻7号紙発行予定  
3/15 " 8 " "  
6/15 " 9 " "  
9/15 " 10 " "

・7号紙に対する業務分担

・定例委員会を毎月第3火曜日とする

11/17

・7号紙進行状況説明

(次号からは割付用紙を拡大したものに、直に原稿を書き込むことを試みる)

・「建築バース集成」について

・技能検定「建築透視図製作」例題集について

## 新会員紹介

AR協会員の名簿を作成中ですので、後日正式なものが発行される予定です。今号での紹介は氏名のみとします。

関西支部 浅田能生 熊尚之

## ミニコミ

▶「技能検定学科試験問題例題集」が発行されました。この本は一般的な書店にはおいてありません。必要な方は中央職業能力開発協会(〒107 港区赤坂3-5-2 サンヨー赤坂ビル内 電話 03-585-0048)へお問い合わせください。

▶画材店田中金華堂では、ブルーのサービスカードを顧客に渡してくれます。これはなんと2割引! の特典があります。詳しくはご来店の折おたずねください。

▶協会では、PRと利益アップの両面から便せん、エスキースブック、シール、ファイルの販売をしています。会員の皆様、大いに活用してください。

▶「透視図公募展」の企画案がありますが、その内容、方法をどのようにしたらよいか、会員の皆様からアイデアを募集します。アカデミックな案、奇抜な案、その他何でも名案をお寄せください。

▶レンダラーにはどうしても高価な画材が必要な場合があります。会員証を提示すれば割引になるといったメリットを期待する声が多く、その実現が待たれています。

## 海外ツアーアート計画 広報 山澤

我々の協会もこのところ大分内容が充実し、会員諸氏の相互連絡も行われているようですが、さらに皆様方の親睦と建築知識の向上をめざし、旅をしてみたいと考えております。また会員の中で海外に行きたいのだがなかなか一人では行きにくいという方もおられると思いますし、なにか機会がないと事務所として行かせられないという方々もおられると思います。そこで今ポストモダニズムの波にゆれるアメリカ南西部を主に日頃雑誌でしか見ていない建物や美術館及び景色等を比較的ゆっくりと見て回りたいと思います。加えて人数によっては著名な若手建築家を講師として呼び、解説をお願いし、我々とのかかわり等を論じながら楽しい旅にしたいと考えております。時期といたしましては来年の9月前後にロサンゼルス、メキシコシティ、ヒューストン、ニューオーリンズ、アトランタ、ダラス等を訪ねたいと思います。またご意見がございましたら、山澤までご連絡ください。お待ち申しております。



(関西支部広報担当 宮後 浩)

# 建築家に聞く③ 宮脇 檻氏



宮脇 檻

1936年 愛知県名古屋市生まれ  
1959年 東京芸術大学建築科卒  
1961年 東京大学建築科大学院 修士課程終了  
1964年 宮脇檻建築研究室開設  
1980年 日本建築学会賞受賞「松川ボックス」

皆さんのお仕事から関係のある話を始めますと、私はベースを今までに何千枚も描いておりますし、もともとベース屋であったということを自認しております。というのは、絵描きの息子で学生時代親からの仕送りが期待できないため、芸大生のほとんどがベースを描いて稼いでいました。また模型等もアルバイトとして沢山作りましたし、ベースも描きまくったものです。

当時は正規のベース屋さんがいなかったためです。その頃、専門家としてのベースは竹中工務店の光藤さん(現AR会長)が描かれた日活ビルディングのベースをみて、感心していました。ですが芸大ではベースのうまい奴は建築もうまいといわれており、ベースをかなりたたきこまれて、それを余技に利用しておりました。それらの多くはプレゼンテーション用のスケッチベースが多かったものです。というのは手が速かったからです。その中で記憶にあるのは、日建設計の仕事で現場に出て、施工主に説明のためのスケッチベースを描いていた時のことです、プロは厳しいなあーと思ったのは、亡くなられた杉浦さんがある日、スウェーデン産の赤御影の現物を持って来て、このカウンターは現物通りの色をしてくれといわれ、水彩絵具でいい加減な色しか出していなかったので、非常に苦労したものです。しかもその時は、20枚くらい描いた中に人物が建物に合わないといわれ、まいりました。またその時は修学旅行に行く間際で、明日旅行にいくという日の前日までに仕事を仕上げた上で、実は明日から修学旅行に行くので、お金がありませんからすぐくださいと言ったら、杉浦さんがぶつたまげてしまい、

あわてて残業していた社員からお金をかき集めていただいたおかげで、修学旅行にもいけました。それから皆さん知っているものでしたら、東京タワーのベースも描きました。というのは、最初他のベース屋さんが描いたのですが、あまりにも大きいため図法通り描けずどこから聞いたか私が指名され、立面図を壁に貼りスケッチしながら描きましたら、あんまり狂わずでき上がりました。

それからある日、日建設計の林昌二さんから京都国際会館のコンペのベースを頼まれたのですが、すでに設計事務所に勤めており、ベースだけなら断る(私は建築家であって、ベース屋ではないからだといい)ただし一緒にコンペに参加させてくれるならベースを描いてもいいといったら、林さんが日建設計の組織上他の者を参加させることはできないといわれ、その話は流れてしまいました。

その他に、大学2年の時からモダンリビングという本の編集に加わり、図面のトレスをしたり、ベースを描いたり、レイアウトやイラスト、他に原稿までやらされましたが、究極はベースを描けるということが重要な点で、アルバイトとして芸大生を使うといううみが、使う側のメリットとしてあったのではないかでしょう。そういう意味も含めて、ベースを描くということが私の青春の一部であったといつてもいいと思います。それと、芸大生の中には設計のアルバイトをしている人もおりましたが、私は設計を天職と考えて認めてもらえない時は、怒り狂う訳です。

しかし、いろいろな専門家に頼むことがある程度は認めているのですが、建築家の多くがそうであるように、心の底から満足はしていないのです。「俺がやればもっといいものができるのだが、まあ今回は時間がなかったので、しかたないではないか」と思いつつ、このところはこうしたらという悪いくせがついでます。皆様のお付き合いの建築家の中にもいると思います。それは我々はなんでもできるという自信があるからではないでしょうか。特にヨーロッパでは、建築家くずれの人がいろいろな分野で才能を発揮しています。ある映画ではスタッフの半数以上が大学の建築科でしめられていたという話もありますし、建築家はある意味で潰しがきくということがあるかもしれません。

しかし、スタッフにはベースをどんどん描かせます。それは部分ディテールや軸組み、構造等も描くことによって理解するし、打ち合わせにも使えるからです。しかし、元来私がベース屋ですので、スタッフが描いたものをけなすので、だんだん皆んなが描かなくなったり、今でも私が徹夜までして描く羽目になっています。こういうキャリアで進んでこられた方も案外多いのではないでしょうか。特に高須賀さんやジャコビイ等も同じ道を歩んできましたし、元来昔の建築家はベースを自分で描

いたし、また重要分野であった筈です。今みたいに専門職の方々もいませんでしたので、現在のように専門分野に分かれてベースが成り立つようになつたのは、竹中工務店に光藤さんが来て、ベースのセクションをつくられたのが始まりのようです。その当時は、ベースというのは自分で描くもんだと思っていましたし、やらされました。例えば今椅子をコレクションしているのですが、その中で特にバウハウス時代の椅子ですが、全部建築家がデザインしている訳です。

私が芸大に入った動機も、工業デザイナーになろうと思ってたし、芸大の建築では工業デザインもでき、他に家具のデザイン、その他諸々のデザインができた訳です。今思いますと、初期の建築家は家具やその他のデザインも手がけて、その中にグッドデザインのものが多く残っています。よいベースもすぐれた建築家が描いていたという認識の上に立ちますと、ごく初期の建築家しかよいものをデザインできない時代を経て、徐々に職能化が進み、現在では建築家でも椅子等のデザインはしないし、またしても遊びの要素が強いようです。実用に使われているものは全て専門の家具デザイナーの方々がしているものであり、そういう意味でベースもあえて建築家が描く時代ではなく、専門家に頼めばよいという考え方もあるかもしれません。

最近では、私の事務所も時々外注に出しています。何故ならば時間がないからです。所員のではなく、私の。また所員が描けば私が鼻先で笑うのですから、所員のだれも描かないのです。しかし、外部の人に発注した場合は、笑いません。何故ならば私は一応専門家志向だからです。ですから私も建築家として認めてもらえない時は、怒り狂う訳です。しかし、いろいろな専門家に頼むことがある程度は認めているのですが、建築家の多くがそうであるように、心の底から満足はしていないのです。「俺がやればもっといいものができるのだが、まあ今回は時間がなかったので、しかたないではないか」と思いつつ、このところはこうしたらという悪いくせがついでます。皆様のお付き合いの建築家の中にもいると思います。それは我々はなんでもできるという自信があるからではないでしょうか。特にヨーロッパでは、建築家くずれの人がいろいろな分野で才能を発揮しています。ある映画ではスタッフの半数以上が大学の建築科でしめられていたという話もありますし、建築家はある意味で潰しがきくということがあるかもしれません。

また話を戻しますが、だんだん分業が進みますと、それはそれなりに結構なのですが、私のような古い時代の人間は、はたして分業して本当によいのかという疑問が出てきます。もちろん別の分野では分業によって成

功している場合もありますが、我々の世界では分業化することによってかえって、オーガナイザーが消えていくような気がしてならないのです。それをだれがするのかということですが、昨今ではオーガナイザーまでいかないプロデューサーみたいな人が多くなつてくると、またもう一度昔に戻つて、オーガナイザーの人たちが増えてくるような気がしてならないのです。その中で建築家は一種のオーガナイザーの見本であると思うのです。ベースや構造がとりわけうまくなくとも、根本的なセオリーやある程度の知識さえあれば、建築全般をまとめていくことができるはずだし、昔の建築家はそうして来た訳です。今の時代のように分業化が全般にわたつて進んでくると、その反動で昔の建築家が必要になってくるでしょうし、私はかえつてその古いタイプの建築家をめざそうと思っています。

今私は住宅専門の建築家だといわれておりますが、本人はそうは思っていないのです。現状では建築全般の中で、住宅とか商業建築や都市計画というようにかなり細分化されておりますが、私はかつて都市計画も専攻しておりましたのである程度までは語れますし、事実都市計画のプロジェクトを手がけております。ようするにあまり専門分野にのみ没

入しますと、専門家バカになつてしまい、トータルにものを見れなくなつてしまう傾向にあります。究極は都市計画であつて、住宅設計その他の建築も、人間を通してものを考えたりデザインしている訳ですので、人間に身近な関係をデザインしていれば、建築全般にわたり手がけることができるはずです。

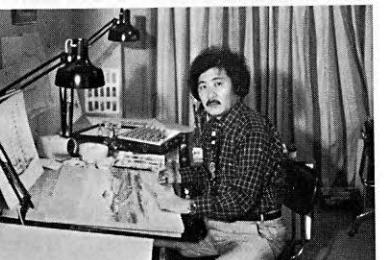
昨今のようにマンションしか設計できないような人は建築家ではなく、建築屋になつてしまつし、建築家としていろいろなことができるのに、あたらおもしろく生き方をしているようです。高須賀さんのように、ベースから建築の世界に入る方もおり、いろいろなことをしていいのではないかと、逆提案をしていただきたい。またそれをできるくらいに、皆さんも建築全般にわたつて、勉強したり他のデザイン等もしてください。

(取材/広報委員 山澤)



## アトリエ訪問

山城 義彦



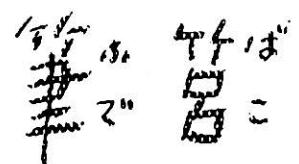
広報委員の福田寛氏より電話あり、「アトリエ訪問」の原稿をかくようと。えつ、訪問される側が「アトリエ訪問」の原稿をかけとはどうもフに落ちない。納得せぬままにつ

い何となく引き受けたものの何をどうかばよいかさっぱり分からぬ。だんだんゆううつ、実に困ったものである。そうだ、しかも立川氏につづいて私が書くのは順序として年寄り順ではないか、これもますますおもしろくない、深谷氏は私より若いのか。きっとそり見えたにちがいない。(深谷元帥、どうも失礼) 一体誰がこのような企画を立てたのだろう、うらみ千万である。

グチを言っててもはじまらない。何をかこうかと表紙のタイトルを見ると、JAPAN ARCHITECTURAL RENDERERS ASSOCIATION とあるだけで、広報紙か会報紙かさっぱり分からぬ。中身は広報、会報一体混然としている。これも分からぬ。

先輩諸氏を前にして、今さら改まって「バ

ースと私」なんてテレくさい。こうなれば私の自画像一神戸・戦争・天皇陛下・集団疎開空襲・貧困・敗戦・武力放棄・アメリカ兵・平和憲法・食糧難・闇市・古橋選手・ストップ・母もの映画・吉田茂・美空ひばり・安保闘争・ピカソ・朝鮮戦争・高度成長・建築ブーム・経済大国・ベース屋・オイルショック・低成長・レンダラー協会・土木建設業界倒産数史上最高・軍事力増強…以上だれがいったか歴史はくり返す。それでも私はベースを描いて行く。「みんなで描けばコワクない」を信じて。当年取って46歳、白髪まじりに老眼鏡、ロヒゲはやって、少々太め? のっそりうろうろとアトリエの中を熊のよう歩いてる。オワリ。



光藤俊夫

山澤博は、いなれば私の一番弟子でした。いまやこの道の大ベテランを揃めて弟子呼ばわりするのは気がひけますし、彼が私のことを今でも「センセエ」と呼んでくれるのは、実は、「先生」として何ほどものものを与えたわけでもない私には、照れくさく、しかしそれは、単に彼が私につけた「アダ名」である、という意味では、それほど深刻な師匠と弟子というほどのものではないのですが、まあ、そう言えば言えるかすかな事実もあることですから許してください。

ところで、とにかく彼もまた「これでバース屋がつとまるのかいな」と心配させるほどの水彩画を携えてやって来た時には、本当のところ「人手ができる助かる」よりも、かえって「手がかり忙しく」なりそうな嫌な予感がしました。そしてそれはその通りになりました。無口で気長、それでいて頑固で自己主張が強く、彼の手がなかなか指示通りに動いてくれないもどかしさに、ただだけがギャアギャアわめいていた時期がしばらく続いたのです。しかし今から思えば彼は彼でじっと歯をくいしばり、何がなんでも一流的バース屋になってやろう、と腹を決め込み、やる以上は下手な線は一本も引くまい、間抜けた色は一切使まいと、それでなにかと行動に慎重であった、そんなフシが大いにあったのです。私も「無口で気長」という点を除けば彼に似て「頑固」で「自己主張」の強い男ですが、たしか入社して2年目くらいのある日、上司に作品をケチョンパンにくされて、目の前でビリビリ破

「バース屋の名簿  
山澤博の巻」



昭和35年画  
新日本橋ビル  
(絵とタイトル  
筆者)

## 弁証法的自己表現

四十澤 健文

小生がバースと出合ったのは、かなり遅かった。幼い頃から「色彩、興味を持ち、高等学校の時は、個人指導で絵を習いつつ形、興味を持ち、4年間洋画研究所に通い、時代デザイン専門学校にもぐりこんで、デザインのおもしろさ、造型の楽しさに心を動かされ……、と言うような時代を過ごし、ある時、現実的な諸問題からインテリア設計を学ぶ機会を得て、そこで初めてバースのことを知りました。

バースも空間を表現する一つの手法だな、と表面的に理解していましたが、ある時学校の先生から「お前、俺の仕事を手伝ってくれないか、実はボーリング場のインテリアなんだ」と説かれて、小生「やります！」と簡単に返事をしました。これが大変、学生ゆえに授業に出て、終わったらすぐアトリエで打ち合わせ、休日には現場、クライアントと打ち合わせ、帰って課題（学校用）をやり、後に製図、作画をやる毎日でした。その時バース（粗末）を描いてみて、クライアントに一番効果的だったのです。これは初体験だったので驚きでした。当時は、そのような仕事をやり続けて、就職時にあわてて、掲示板を見て案内が一つあった。先生にも勧められたので試しに受けたみようかと思い、現会社、伊藤喜三郎建築研究所の入社試験を受け、運良く決まりました。面接をした時「この方が所長？」と思いました。やせていて誰にでも頭をさげる腰の低い人で、一見やさしいおじさん……という感じでしたが、眼はクールでさわやかな、それでいて情熱的。その時、事務所の壁を見て驚きました。今まで一度もこのようなものを見たことがない表現の絵画？バース？なのかわからないのが、奥の壁に掛かっていました。それを描かれたのは所長だと聞かされて二度びっくり！俺にもできるかどうかわからないけれど、「一丁やるか！」と決めて、10年このかた楽しくむづかしく、それで何とやっかいなものだろうと感じていました。現在も同じですが、それに加えて設計者のデザイン意図、打ち合わせ時の言語のニュアンスなどで何を言いたいかなど神経を遣い、時には早合点、時には勘違いなど間々ありました。これも体験で多少ギャップは埋まりつつある昨今です。表現（バース）する場合うまくいかないことがあると、ストレートに悩んでも無理（落ちこむ）なので、会社から遅く帰っても必ずアトリエに入り、油彩、水彩、アクリル画等を、また油土、木、石をつかって立体の把握など、当初は習慣的にやっていて、今では生理的にアトリエにとじこもりエアープラシを使ったり、カメラを使って人、物などを撮影したりしています。年に何度も妻のことを忘れて旅に撮影機材

と簡単な絵の道具をもって飛び回り、仕事（ベース）に使えるものと雑仕事に使うものに分けて資料棚に整理、こんな生活状態が5～6年つづいています。こうなったのも所長が描かれたあの一枚の絵画？バース？であり、また所長の高齢にしてあのパイタリティーの影響だと思います。良き手本がそばにおられるので、毎日所長と会うと感ずることは、色彩の豊かさ、そして多感であるということです。

しかし、何をするにしてもひとりでは程度があるので、有能な協力者が必要ですね。小生は公私ともに画材類はS画材、写真関係はBラボとお付き合い願っています。でも結局は自分自身でなにをどのように表現すべきかまたあるべきかを自分で判断しなくては協力者の力をフルに活用できない……と小生自身に言い聞かせています。このAR協会に入会して多くの方々を知り得る機会を広報委員会に与えられた特典だと思っています。満1歳になったAR協会、知恵の発達は3歳までが急上昇すると聞きました。可能性が多分に秘められていると思い、広報を全国的に網羅する血管にしていきたいですね。

## ARに参加して1年

村井謙介

合気道の友人、中野氏からAR設立時の苦労話を聞いたり、設立時のパーティーにオブザーバーとして参加しているうち、バースに一生をかけている同年代の仲間の存在を知り、参加させてもらうこととした。2名以上の会員の推せんとか、数枚の作品の審査とかがあり、ずいぶんもったいぶっているなあと思いつつ、高額の入会金と高額の会費3カ月分を前納し、さて何が始まるのかと期待していたがナシのつぶて？その後今日教育開発の委員会がありますから参加してくださいと連絡があったが急なスケジュールについてゆけず2カ月余。工業高校の先生相手の講習会がありますから参加してください、ということで工学院大の会場にかけつけたが、ぶつけ本番、日頃の自分のやり方と随分違うのに面くらいながらも何回かの会合で少しづつ皆のベースにのってゆけるようになった。私は建築設計とバース研究の二足ワラジで、商品バースを手がけるより、スケッチバースや、エスキース、名画・名建築のコピー等に関心があり、現研（現代構造研究所、故高橋靖夫氏主宰）スタイルで訓練されてきたので、その後何回か行われた講習会でも皆さんのがやっている方法が何か目新しく感じられて面白かった。特に福島氏を中心にまとめた図法の原理性や実戦的作図法はこういうとらえ方もあるのかなあと感心させられた。先日コンピューターがどこまで我々の仕事にとってかわるのかという話題が出たときに、図法はもちろんペン画やエアブラシはコンピューターにのせやすいのではないかということにな

ったが、少なくとも図法を覚え込ませたコンピューターを協会で所有し皆で使えば高くつかないのでは、なんて話が出たが、ぜひ実現に向けてスタートしてもらいたいテーマだと思います。そうすれば土木分野への食い込みや官庁仕事の開拓も容易になるのではないか。

もう一つ協会に入る動機に海外との交流がある。国内の結束を固めるのも大切なことだが、海外の技術や文化にふれあうことはなかなか個人ではできにくいこと、日本を代表するAR協会としての来年の具体的行動にのせてもらいたいもの。バースの表現は言葉を不要とし国際的共通表現として人種、世代、性別をのりこえてゆくと信じている。それには絵画の国際交流展のように、春のオリジナル展（原画展？）を関西に留まらず海外へも立ち出しききっかけにならないものかと思っている。

現在私は教育開発委員会に配属されているが、総会後組織がえがあるのかと思ったらそのままのまんま、親しい仲間はできるが、会って話をしたこともない会員がいるのも残念なこと、この前の総会のように各委員会からの混合チームで事をすすめるのもよいがメンバーチェンジもあってもいいのではないか。親しすぎる仲間に他人が入りこむのはなかなかむづかしいということもあります。その気合いでかかるかどうかには、いろいろな要因があります。まず体調——風邪などで体がだるかったりするとどうしようもありません。

精神的な不安定——家庭での心配事や人間関係等、精神的に安定していないとき。

設計の内容——一本筋の通った素晴らしい設計に出会ったときは、「ウム！これは面白そうだな、一丁ヤッタルカ！」という気持ちになります。

設計者の意気込み——設計者の設計及びバースに対する意気込みが感じられるときは、それがこちらにも伝わってきます。また資料等も十分に準備され、指示すべきところと任せることを心得いろいろな面で配慮されているときなどは、こちらも非常に気持ちが乗ってきます。

何案も同時に描く時——このような場合は、やはり一点を描くときより集中力が分散するようです。変更案を描く場合この場合も新たなものを描くときより、やや気持ちが乗らない気がします。

前の仕事との関係——前の仕事が終わって次の仕事を始めるまでに半日ぐらい時間がとれると気持ちの整理がうまくできます。また前の仕事が問題なく引き渡してきたときはいいのですが、設計変更等でごたごたしたときは、次へのつながりがスムーズにいきません。途中での出来事——製作途中で変更が入ったり、チェックが入ったりすると、やや緊張感が薄れるようです。以上、いろいろと分かりきったこと、失礼なこと、また自分勝手なことを書き並べましたが、要は最終的に素晴らしいバースができればいいのであってそのためには、いかに「気合い」がかかるかが大切なのです。



## バースは「気合い」で描く

種橋重次

私が想像するに、絵描きがキャンバスに向かうときは、ずっと以前からイメージを思いめぐらし、またスケッチを重ね、諸々の蓄積されたものが煮詰まり、そして気持ちが盛

# キャリアウーマン

10年前の写真



大和祐美子

田中啓子

・逆子で生まれたため、ともに角をかくし持つ

・両親の年齢差とともに8歳違い

・長女である（故にしっかり者）

・妹（売約済み） | ①弟（売約済み）

・本人未だ棚ざらし

・熊本育ち | ②幼稚園が熊本

・ともに親のスネをかじり続けている

・良く食べる | ③食べないという割には良く食べる

・すぐ乗るアホ

・生きものが好き

ともにマルチーズを飼い、観葉植物を買わずにふやすことに熱中

オース | メス

・昔の愛読書でもう一度読みたい本

カバヤ文庫、キンダーブック

・ムサビ芸能デザイン卒業

先輩 | 後輩

・2人とも、未だ容色衰えず、華麗なる雰囲気をただよわせながらも童女のような純真さを失わず、しかも知的な大人の女性として仕事に打ち込んでいる。

現在



つま恋総会にて

文才はあるのだけれど時間がなくて……と延ばし続けた原稿の締め切りが間近に迫り、催促の電話と広報委員の責任感から、苦肉の策として持ちかけた対談形式に、グッドアイディアと乗ってきた私の尊敬する先輩、大和祐美子さん。（二人とも、本当はキャリアウーマンと呼ばれるのはキレイなのですが）

11月初めのとても寒い夜、二人の淑女が夜更けまで話に花を咲かせたのは良かったのですが、咲き過ぎてあっちへ飛びこっちへ落ち

で收拾がつかなくなり、これでは仕様がない」とイメージアップのためにも、まとめ役としてフェミニストのX氏にインタビューをお願いし、私たちの魅力を十分に引き出して頂くつもりだったのですが……。

当時は、ちょっとり気取った二人を前にX氏がおもむろにテープを回し始め、「それでは……ありふれた質問からですが、お二人はこの仕事を始めて何年になりますか？」

すると大和さんから「15年目、次に私と、続けて書けばこのコーナーも無難にまとまつたのですが、それでは何となく物足りないと

思い、もう一度状況を再現させながら書き直した結果、次の如くなってしまいました。

本来なら、その日は高層ビルの最上階にあるレストランで夜景を眺めながら、ゆったりとした食事で大人の雰囲気を出せたら……という予定だったのですが、X氏の都合で急遽六本木の私の仕事場に変更になってしましました。

ワインを冷やし、コーヒーを沸かして、皿にケーキやらおつまみを用意して待っていたところへ、割と時間には正確にわが先輩が息をはずませてやって来ました。

両手で大事そうに抱えて来た紙袋を『はい、と手渡され、その温かさに何だろうとのぞいたところ、真っ白な肉まん、あんまんがぎっしりと押しつぶされそうに詰まっていました。私としてはコーヒーとケーキで始めたかったのですが、せっかくなので冷めないうちによく、大和さんがしきりとすすめるので、皆でまず肉まんを片づけることにしました。X氏は雰囲気としては食べながら楽な気持ちで本音を出すように持って行こうと努力してくださいましたようですが、肝心の二人はテープが回り始めたことにも気がつかず、X氏の質問が始まった時、祐美子さんは二つ目の肉まんに手をのばしたところでした。

思わずX氏のつぶらな目が大きく開かれ、「ずい分食がすすみますね——」

そこで私がX氏に、「ワイン召し上がりますか」とすすめたのですが、肉まんとワインでは気持ちが悪くなるからと遠慮されました。

ここから先ほどの質問の答えの続きですがX氏人生の半分ですか。

大和まだ半分にはならないけど……。

X氏いやお世辞のつもりで言ったんだけど、そんなに年なんですか？若く見えるけど（笑）。田中さんは？

田中私はのべで行くと10年位でも途中止めたりしているので、正味は大和さんの半分位じゃないかしら。

X氏まあ、キャリアウーマンとしてその位やればという条件があるから……。

大和私は最初この原稿を書くにあたって考えたことは、『ブタもおだてりや木に登る』で木に登ったブタよろしくやってい

るといわれているような気がして……。X氏でもブタが木に登ればやっぱりキャリアウーマンだよ。普通のブタだったら木なんか登れないもの。

X氏の視線は、三つ目に挑戦はじめた祐美子さんの口元へ釘づけになったまま。

ここまで書いて、私は少々不安になってきました。これを読んだ人たちはきっとガッカリされるのではないかしら。という訳で後半

祐美子さんにまとめて頂きました。（田中）

朝のやわらかな陽差しが昼間のぶしつけな陽差しにかわる頃、フラフラと床を離れ、なにをするでもなく20~30分を、ボンヤリと机で過ごし——と始まるのだが、今日だけは違っていた。けたたましい電話のベルと、あわれな『けい子ちゃん』の一聲で一日が始まった。『けい子ちゃん』である。田中さんなどという大人のイメージとはほど遠い声である。

『まだできてないの。今からいくから!!』  
さんざん感謝もし、手抜きができたと喜びもした原稿だが、できていないのである。  
書きだしをはじめ、数枚できていた原稿も『肉まんを中華まんじゅうにする？ 肉まんは書くのに、コーヒーと合わないもの。中華まんじゅうでも同じね。と肉まんにこだわりはじめたのが運のつき。先に進まず、あげぐの果てには、肉まんをもって行った私をなじり、肉まんを二個もたべたといつては人を笑い、あの時のテーブルセッティングが、台無しになつたと嘆く彼女に書けば……とこの寛大さ。

この寛大さが間違っていた。彼女の『雑談会の集録文』は、『肉まんを抱えてやってきた私を描写することによって、のどもとのつかえがとれたかのように筆が進みやたら枚数を上げ、肝心の『キャリアウーマン』の集録文にはほど遠いものを書きはじめ、『これがうけたら、集録したものは、X氏には悪いけれど次号にのせればいいのだから、と、とびたくともとぶ羽根のない『エセ・キャリアウーマン』のあわれな『けい子ちゃん』はとんだ気分にひたり絶対にうけるわよ、こういう状況集録の企画いいんじゃない？とのりにのつては、原稿ときいただけで溜息のできる気力、気概ともに持ち合わせのない私をしりめに書き終えたというか、枚数をあげたのである。

年長の私がついていながらこのようなおソマッな文章を提出したことを探くおわび申し上げるとともに、しみじみと『朱にまじわれば赤くなる』のことわざをかみしめ、友を選ぶことのむつかしさを痛感した次第です。（大和）

タイムオーバーで渡された祐美子さんの原稿、ひどいなーとは思いましたが、先輩をたてるのも後輩のつとめ。これを読んで自分がましたと安心する女性も多いことでしょうもう夜の10時、今日の仕事はつかれました。

## 仕事を通して思うこと

南几代美

フローリング



『パースとともに』③

岩崎昇子

15年ほど前の建築会社での働く女性の地位は、今のようにキャリア・ウーマンと言ったカッコ良さどころか、ガッチャリと男女差が激しく、とてもその中で一生やって行くといった保障もなく、それだけサラリーマンと言つてもわりと醒めた眼で自分の会社を覗いているところがあったような気がします。

大きな組織での仕事はどうしてもその会社らしいデザイン理念で統一されているので、ドンドン流れている仕事もマンネリになるくらいがあるものです。たまたまそんな時、フリーで他の事務所からパースを描いてほしいとのまれると、違ったセンスの建築家やインテリア・デザイナーをお訪ねするのが楽しみで、つい自分の時間の無理を承知で仕事を引き受けてしまうのでした。その頃の青山・六本木には、今のようにぎやかではありませんでしたが、ボッボッデザイナーたちが住みつき始めました。マンションが建ち始め、小さな一部屋を小奇麗に設計室にしている人や、足の踏み場もないほど資料にうまった男性くさい事務所、堅い雰囲気の大学の研究室、そうかと思うと、銀座のキャバレーの2階に事務所をもっている人、様々で扉を開けると実にその雰囲気で仕事の内容がわかる気がして若かった私は、体力にもの言わせて好奇心満々どこへでも飛んで行ったものです。そんな中に、倉又史郎氏の事務所に伺つたのもつい先日のことのように思い出されます。青山墓地の近くにあるまだ新しいビルで、モダンな内部で若い方々がとてもイキイキと働いておいででした。彼の作品は、ご存知の通りモダンで抽象的なものが多く、どちらかと言うと保守的表现の私には、勉強が足りなかったのですが、彼のお人柄や、色の指定のされ方がとても自由で自分の身の回りからポッとピックアップされるやり方は、さすがアーティストでした。その後その時のスタッフを解散された、とのニュースを聞き、これも自分のセンス一つで勝負しているフリーの人の潔さなど、解説したものでした。パースという特殊な仕事を通してスバルシイ沢山の方々と接しられたことはこの上ない幸運なことでした。建築という実に大変な仕事、奥行き深い仕事にガッブリ組んで日夜戦っている設計の人、現場の人々、一つの大好きな建築物がドラマのように個人の喜びや哀しみもつまみ込んででき上がって行くさまを、身近に体験できたことは、なによりもパースを描く技術を持ったたまものであります。

## 画材店点描

なびす画材店

田淵輝美

アーキテクチャルレンダラーの皆さん、日頃のご愛顧を感謝いたしております。私がレンダラーズの仕事に接したのはかれこれ20年前のことですが、大成建設の大熊さんという方のフリー手帳のパースをワットマン紙に描いた作品を見て味のあるその描き方に感銘した記憶があります。当時はパース作品をお預かりして1~2時間の間に特別サイズのパネルに仕上げて納めるのが常で、大変忙しい思いをしたものです。でき上がった作品に水を打ってペネリングするのですから、大変な神経を遣う仕事でした。そこで私がキャンソンボードというものを考案、試作し、毎月「デザイン」という雑誌に広告を2年間続けて掲載したのですが、思うように売れませんでした。当時はまだ製図板に紙を貼りして描いていた習慣からなかなか変えられなかつたのでしょうか。パースにキャンソン紙を使用した最初の頃は、夜景パースを含めて個々に使う色はまちまちでしたが、その中から最も売れていた3色の紙を選んでボードにしましたがしかし現在ではNo.343のイエローグレーが一番好まれております。時代の流れ、建築様式の変化によって、キャンソン紙の色の選び方まで変化するのでしょうか？ 12~13年前にはブルーグレーのキャンソンボードを使った作品が多く見られましたが、私どものお客様の中で現在ただ一人だけお使いになっている方がいるようです。恐らくフランスのキャンソン社では大変長い間どうしてイエローグレーの紙だけが大量に使われているのか、不思議なこと一つではなかったでしょうか？ コンペの作品を各社から預かって、その作品を他社の方に見られないように気を遣うのも、我々に課せられた義務として実行しております。レンダリングTANAという会社をレンダラーズの方々が集まって作った事務所が乃木坂神社近くのフトン屋さんの2階にできて、画材を納品に行ったのが私どもの店とパース専門の方々とお付き合いを始めた動機です。その頃はパース専門の事務所があまりなく、第一線のレンダラーズの方々が非常に忙しい思いをして働いていたことを思い出しまして、現在のレンダラーの増加といろんなテクニックが見られ、時代の移り変わりを身をもって体験している次第です。今回はこれをもちまして、私の回想録の一部として終わらせさせていただきます。

□今号は短期間の取材スケジュールにもかかわらず、記事、広告とも沢山あります。変更をしましたが次号回しなった分もあります。悪しからずご容赦下さい。関係者のご協力に対し、厚くお礼を申し上げます。

（広報担当 中野）